総勢74名、かつてないほどの大旅行団

小松電機産業「第2回訪中文化経済交流団」

古くから日本と縁のある4都市を訪ねて

参加者全員。民間でこんなに多くの人が行ったのは初めて

5月2－7日、総勢74名という、かつてないほどの大旅行団が、中国を訪れた。20代から80代まで幅広い世代層の人々で形成されたこの一行は「第2回訪中文化経済交流団」。主催者は、古代より大陸と密接な関係のあった島根県「出雲」の電機機器メーカー「小松電機産業株式会社」社長・小松昭夫氏だ。

小松電機産業は水管理システム「やくも水神」や高速シートシャッター「門番」などの開発を行う一方、94年にはHNS（人間・自然・科学）研究所を設立、郷土の偉人や、日中・日韓関係などの研究や出版、シンポジウムの開催などの活動を行っている。

今回の交流団は、中共徳州市委副書記・田玉茂氏、棗荘市対外経済貿易委員会主任・王洪軍氏や本紙編集主幹・孔健との出会いから、HNS研究所の活動の一環として、日本の思想文化に大きな影響を及ぼした中国大陸の文化に触れるという目的のもと開催され、日中平和交流21代表・本澤二郎氏、山東省人民政府外事弁公室主任・張偉齢氏、済南市公安局副局長・孟富強氏らをはじめ、中日両国の多くの有志の協力により実現した。

中国南方航空のチャーター便で一行が訪れたのは、古代から現代までの日本と中国の交流の要となった西安、曲阜、済南、北京の4都市だ。

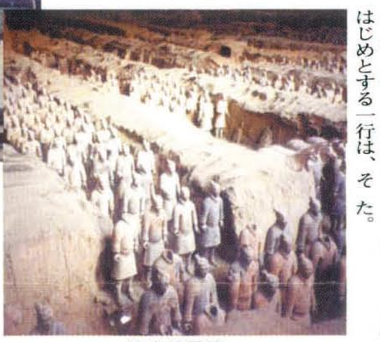
■西安

シルクロードの東の基点として栄え、唐代の都・長安として知られる西安で一行は、兵馬俑坑博物館、『西遊記』で知られる唐の高僧、玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典の保存と翻訳のために建立を進言した大雁寺などとともに、当時、自費留学生であった空海が真言密教を学んだ青龍寺を見学した。同時期には、官費留学生として唐に渡っていた最澄も天台山で仏教を学んでいる。

「仏教は現在に至るまで、日本人の思想や宗教の面で大きな影響を及ぼしている」と考える小松氏をはじめとする一行は、その原点となった地ともいえる青龍寺で当時の時代背景と思想に思いをはせた。

また、小松氏は2日、西安市長を表敬訪問。日中友好はもとより、恒久平和のための普遍的文化を創造すべくさらに尽力していくことを約束した。

西安青龍寺にある空海記念碑


西安兵馬俑

■曲阜

山東省曲阜は仏教とともに日本人の思想文化の源流となっている儒教の祖、孔子や孟子の故郷だ。ここ曲阜では、孔子廟、孔子林、孟子廟、孟子林、孔子文化大学（前号12面特集を参照）を訪れ、儒教の思想がどのようなところから生まれたのかを体感した。

同大学では日本語科の学生と交流、HNS研究所が出版した本を中心とした日本語の書籍100冊を寄贈した。一行が訪れた日はちょうど、中国でのゴールデンウィークの中日にあたる4日であったにもかかわらず、多くの学生が一行を歓迎するため故郷に帰らずにいてくれたという。参加者の女性の一人は「こんなに歓迎してもらえて、本当に嬉しかった」とその感動を語っている。

7代の皇帝が資金を投じて孔子廟を拡張して（曲阜）

孔子文化大学、孔子像の前で

孔子文化大学に100冊の本を寄贈し、記念品をおくられる

曲阜市長との懇談夕食会

孔子の墓所

■済南

山東省の省都・済南では、山東博物館を見学した他、今回の旅行のメインテーマの1つである孔子、孟子像の製造依頼の調印を行い、後日発注予定である出雲の治水の偉人周藤彌兵衛、清原太兵衛の銅像とともに日本にお運びする計画がHNS研究所所長・小松昭夫氏と中国画報協会会長・邢雁氏との間で確認された。

周藤彌兵衛のような地域の偉人は、日本国内で1千名をこえる。HNS研究所ではこの運動を全国に広めるため、戦後農業の近代化に大きな影響を及ぼしたベストセラー『家の光』の発売元である共同宣伝社をはじめ、関係方面に働きかけ現在活動中である。

これらの銅像は、済南の泉城公園に設置されている孔子、孟子像と同じ大きさのものである。偶然にも小松氏が「第1回国際柘榴祭」に参加するため前回訪中した際、訪問した山東省棗荘市・台児荘市で製造されているという。台児荘市は、蒋介石の国民政府と毛沢東率いる共産党が協力して、日本軍を敗退させた歴史的な地域である。

この度の訪中で初めて分かったことがある。実は小松氏の母校である松江工業高校は戦時中兵舎として訓練が行われていたが、出雲の六十三連隊がこの地で多くの災難を与えるとともに、約1千名の方々が亡くなっていた。

この思わぬ偶然に、小松氏は「まさに縁は異なもの、事実は小説より奇なり、だ」と驚いたという。

今後、これらの銅像の設置場所の選定などが行われるが、小松氏は「訪問団の参加者を含め、多くの方々にご意見をいただく中から決定する。中国から日本に銅像をお運びする際には、パレードなど大々的なイベントを構想している」と計画している。

済南泉城公園

調印の様子。左が中国画報協会会長、右は小松社長

左より小松社長、孔健、中国画報協会会長。済南泉城広場孟子像前にて。この像と同じものと日本に持ってくる

「旅で芽生えた友好の芽を枯らす事のないよう育てていきたい」

■北京

一行の最後の目的地である北京では、故宮、天安門広場とともに盧溝橋と中国人民抗日戦争記念館を訪れた。

抗日記念館では、献花ならびに小松電機産業より「抗日戦争史研究暨和平教育基金会」に100万円を贈呈した。その際、小松氏より「世界人類未来の恒久平和につながる知的共有財産の創造」が趣意書により説明されたことがきっかけになり、抗日記念館の資料をHNS研究所が無償で使用できることが決定、調印が行われた。最終日の晩餐会には、中国側から抗日戦争史研究暨和平教育基金会名誉理事長・白介夫氏をはじめ、抗日記念館館長・張承鈞氏、北京大学教授・張碧清氏ら26名もの人々が参加、「一行の謝罪の気持ちと平和への思いが中国の方々にも通じた結果、このようなすばらしい宴になった」と参加者も感動したという。

5日間というハードスケジュールにもかかわらず、20代から80代までの全ての参加者は、一つでも多く物事を吸収しようと、お互いに助け合い、中国の様々な事柄に出会い、学んだ。参加者の一人の「この旅で芽生えた友好の芽を枯らす事のないよう育てていきたいと思っています」というコメントは、全参加者のこの旅行に対する思いを代表している。

抗日戦争記念館見学

記念館館長との懇談

思想の歴史を学び、21世紀の新たな思考の枠組みを

小松電機産業株式会社社長　小松昭夫氏

なぜ小松氏は、自身の会社の事業とは一見、直接関係のないと思われるこのような大旅行団を組織して、中国を訪れたのか？　それには小松氏の哲学が深く関係している。

小松氏は、我々日本人の思想に、日本の地理的位置と季候にあわせ、仏教、儒教が大きな影響を与えたと考える。今回の旅のルートは、まさにその思想の歴史を辿ったものなのだ。

「空海が仏教を学んだ西安、儒教の源である曲阜、現代の戦争の歴史に欠かせない北京の中国人民抗日戦争記念館、それら日本の思想の歴史の一端をなしているものを74名の人々に見せたかった」という。

小松氏は、「今を生きる我々は悠久の人類の歴史に対して、21世紀の新たな思考の枠組み、文化を創造する義務と責任を負っている。ヨーロッパの二元論、弁証法とも融合した新しい思考の枠組みだ。それはまだ人類には見つかっていないとされるが、ビジネスの思想家とよばれるアメリカのスティーブン・R・コヴィー博士の著書『7つの習慣』が、全世界で1600万部を越える発行となるなど、その兆しが見える。志を同じくする方々とともに恒久平和のための知的共有財産としての文化を創造していきたいと考えている」

小松電機産業がHNS研究所で取り組む「太陽の國IZUMO」構想では、その新しい文化と同時に日本の「負の財産」について触れられている。今回の旅で一行は、仏教、儒教という日本人の思想に大きな影響を与えた思想の源流を訪ねるとともに、中国人民抗日戦争記念館を訪れ、謝罪と誓いを述べ、日本の「負の財産」にも正面から向き合った。

「今まで、日本は戦争責任を追及され続ける原因を払拭する努力を怠ってきた。これから、当時国民の一人として『前事不忘　後事之師』、この“負の財産”を直視、事実とその社会的背景を研究、活動するなかから新たな文化創造がはじまる。大阪の小学校で公務員出身の男に児童ら23名が殺傷され、8名もの命が奪われた事件をはじめ、今日本国内でおこっている様々な奇怪な事件は、歴史への直視をおざなりにしてきた結果以外の何者でもない。このままでは、同じ過ちを繰り返す可能性を否定できない」と小松氏は考える。

総勢74人という今回の旅行を組織するのは、小松氏にとっても大変なことだったであろう。それを成し遂げた一番の理由は何か。小松氏は「事業のためだ」という。小松氏は「会社」という概念を、「家業」、「企業」、「事業」に分けている。

「“家業”は家族が生きていくための生業、人の我欲の追求を続けるのが“企業”、その我欲を公益と同化させ、理想的な地球社会へ一歩ずつ誘導するのが“事業”だ」と小松氏は言う。

事業家として、人の心のインフラ整備を目指す小松氏。今回の旅で、こんなにたくさんの人々の賛同を得られ、中国各地で大歓迎を受けたのも、人々がその志に心を打たれたからであろう。今後も、小松氏は、人々にそのような感動を与え続けていくに違いない。一